The Sound and the Fury に於けるキリスト教とCompson家の悲劇

内 田 智 子

While we look not at the things which *are* seen, but at the things which are not seen: for the things which are seen *are* temporal; but the things which are not seen *are* eternal.

2 Cor. 4:18

I

William Faulkner の『響きと怒り』(1929) の4つの部のうち、3つの部のタイトルには、1928年の受難週の Good Friday, Holy Saturday, Easter Sunday に当る日付が付けられている。第1部を語るコンプソン家の三男 Benjy は白痴で、自分の感覚に映るままを語り、キリスト教についても、彼自身は何も語らないのであるが、彼以外の人物たちは、様々な形でキリスト教に反応している。第4部では、黒人教会での Reverend Shegog の説教が登場するが、この説教は "an extraordinary memorable event in American fiction"[1] と言う批評家もいる。この作品は、このように、全体としてキリスト教の枠に何らかの形で関わっている作品であることは明白である。フォークナーが果してキリスト教の信仰をもってこの作品を書いたのかどうかについては、批評家の意見が分れるところであり、結論から言えば、どちらでもないというのが妥当なところであろう。[2] 彼は自らの信仰告白の書を書いたのではなく、様々な人間の在方を描き出したのであるから。それでも、『響きと怒り』に於ては、各人物のキリスト教とのかかわりが、この小説のテーマの解釈に深く繋がっていることは否定できない。本論は、主として各人物のキリスト教とのかかわりを検討しながら、この小説を読み直してみる一つの試である。

まず、各人物のキリスト教とのかかわりを探る方法についてであるが、この小説に於ては、往々にして登場人物たちのキリスト教に対する考え方は、第4部の客観的描写に中心的に現われる Dilsey の信仰と、対照的また逆説的な形で表わされている。例えば、第2部を語る Quentin Compson は、父の宿命論的な考えにとりつかれた挙句、自殺をするが、その前、ディルシーのことを思い出し，"What a sinful waste Dilsey would say"[3] と言っている。ディルシーがきっと言うであろうとクェンティンが考えるこの言葉は、単に道徳的な意味で自殺するのは勿体無いと言っているのではない。この言葉は、自殺するということについて、"It's not when you realise that nothing can help you—religion, pride, anything—it's when you realise that you dont need any aid" (p. 80) と言って宗教を否定するクェンティンの言葉と、対照をなしているようであるからである。そこでまず、ディルシーの信仰がどのように描かれているのか、検討する必要がある。

ディルシーの善良さは、フォークナーも認めるところである。彼はある時、インタヴューに答えてこう言っている。

> Dilsey is one of my own favorite characters because she is brave, courageous, generous, gentile and honest. She's much more brave and honest and generous than me.[4]

実に、ディルシーは、退廃しきった、自分の仕える白人家庭を、一人で支えている感がある。病気がちで、いつも不平を漏らす Mrs. Compson に代って子供たちを育て、家事を切り盛りし、母親のいない Caddy の娘の Quentin の母親役までこなす。しかし、コンプソン家を支える彼女の善良さや強さは、彼女に生来備わっているものではない。神への信仰が、彼女を取り囲む十重二十重の困難さから彼女を支えていると言える。Brooks はこう言っている。

> Dilsey's goodness is no mere goodness by, and of, nature, if one means by this a goodness that justifies a faith in man as man. Dilsey does not believe in man; she believes in God.[5]

ディルシーは殆どいつでも「苦悩に耳までつかっている」[6] 存在であるが、この苦難の中から、神への信仰をますます強めていくようである。後にも述べるが、この小説は黙示録的な要素を多分に持つ小説である。そして、小説の終りの方で、"Dis long time, O Jesus,... Dis long time" (p. 317) と言いつつ、"I be His'n too, fo long, praise Jesus" (p. 317) と言うのも、キリストの再臨を待ち望むヨハネの黙示録のヴィジョンに符合しているようである。更に、彼女の信仰の立場は、次の言葉に如実に表わされている。場面は、ベンジーの名前がつけかえられるところである。白痴のベンジー(Benjamin)ははじめ、母方の叔父の名前をとって Maury と名づけられていたが、白痴であることがわかったので、ベンジャミンと名前をつけかえられたのであった。以下は、モーリーがベンジャミンとつけかえられるのを聞いた、ディルシーとベンジーの姉キャディーの会話である。

> *Name aint going to help him. Hurt him, neither. Folks dont have no luck, changing names. My name been Dilsey since fore I could remember and it be Dilsey when they's long forgot me.*
>
> *How will they know it's Dilsey, when it's long forgot, Dilsey, Caddy said.*
>
> *It'll be in the Book, honey, Dilsey said. Write out.*
>
> *Can you read it, Caddy said.*
>
> *Wont have to, Dilsey said. They'll read it for me. All I got*

to do is say Ise here. (p. 58)

コンプソン夫人は、自分の家柄のため (p. 68)、悲しむキャディーやディルシーのことなど考えずに、子供の名前を変えるという、いかにも迷信的また現世的なことをしてしまう。それに対してディルシーにとっては、名前は一つであって、その名前は、自分がまだ物心つく前から、人が自分を忘れたずっと後ですら、つまり永遠にディルシーである。そして彼女は、自分の名前は "the Book" に記されていると言っている。この "the Book" については、アメリカの家庭に備え付けられている、「ファミリー・バイブル」のことであるとする批評家もあるが、[7] これは Coffee のコンコーダンスにあるように、[8] "the Book of Life" (「命の書」)[9] のことであろう。そうでなければ、人々がディルシーを忘れ去ったずっと後にもディルシーという名前が残るわけはないし (いつかファミリー・バイブルも地上から姿を消す)、ましてや、「私はここにおります」とディルシーが言えることもないであろう。そして、この「命の書」は、いわば天の住民の「市民簿」[10] であって、「神の子として永遠のいのちをもつ者を神が書き記」した[11] 書物である。この「命の書」もまた、ヨハネの黙示録に頻出するものであるが (黙3：5, 13：8, 17：8, 20:12, 15, 21:27)、特にヨハネの黙示録第20章12節に於いては、最後の審判の際、神が人間を裁く基準とする書物の一つである。ディルシーが「私はここにおります」と言うということは、丁度、この最後の審判の折に、天の市民として命の本に記された名前を呼ばれるという彼女の確信を表わしているようである。これに対して、キャディーが「みんなが忘れてしまったずっと後なのに、どうしてディルシーってわかるの？」と尋ねるくだりは、彼女は永続的なものではなく、現世的、一時的なものを見ていたということを暗示して興味深い。また、コンプソン家の人々の、子供の名前をつけかえるという行為は、ディルシーの、永遠を思うヴィジョンに対して、時を、永遠の未来を考えない、現在に限定するものであるとも、言えないであろうか。以上のディルシーの立場を念

頭に置いて、ディルシーの仕える白人のコンプソン家の人々のキリスト教観を探ってみることにする。

II

この小説は、かつては栄光ある南部の一家が没落していった物語である。第1部の語り手ベンジーは白痴であるため、自分の見たこと、聞いたことを、主観を交えずに語っている。この白痴の語りは要領を得ず、あることをきっかけとして、現在から過去へと、彼の意識は自由自在に往き来する。そして、現在の惨めな境遇や、悲しかった過去の出来事、また、一番幸せだった、彼が3歳の頃の過去とが、彼の意識の中で交錯することとなる。ベンジーは3つのものを愛したとフォークナーは“Appendix: The Compsons”に書いたが、それはキャディーの結婚式の費用を払い、クェンティンをハーヴァード大学に行かせるために売られた牧草地と、姉のCandace (Caddy) と、火の光であった。[12] 特に姉のキャディーは、彼にとっては愛情の源であって、この姉がいなくなったことが、彼にとっての大きな不幸であった。例えば、ベンジーの意識の中では、優しい姉が一緒に遊んでくれた昔と、その姉が、愛情のない不幸な結婚をして自分の許から去って行った時とが同じ「窓を覗く」という出来事をきっかけにして並置される。幼いキャディーが木に登って、祖母の葬式が行われる様を窓から覗くシーンは、同じようにベンジーが窓を覗いて、姉の花嫁姿を見てしまうシーンと繋がっていく。

> The tree quit thrashing. We looked up into the still branches.
>
> “What you seeing.” Frony whispered.
>
> *I saw them. Then I saw Caddy, with flowers in her hair, and a long veil like shining wind. Caddy Caddy*
>
> “Hush,” T. P. said. “They going to hear you. Get

down quick." He pulled me. Caddy. I clawed my hands against the wall Caddy. (p. 39)

実に、Thompson の言うように、「彼女の存在はベンの歓びであり、彼女の不在は彼の悲しみ、起りうるかもしれぬ彼女の帰還は彼の希望」[13] なのである。

かつて、キャディーはベンジーにとって「木のような匂い」のする純真な少女であったのに、香水をつけ始め、ボーイフレンドをつくり、ついには Dalton Ames という男によって処女を喪失する。そして、その男が去ってからは、多くの男と半ば投げやりになって関係をもち、とうとう父親のわからない子供を身籠るに至る。彼女は仕方なく、気の進まぬまま、ある銀行家のところに嫁ぐが、父親のわからない子供を産んだために離婚されてしまう。そこで彼女は生まれた子を実家に預け、自分は子供に送金しながら、実家からも締め出されていずことも知れぬ場所で暮らしている。

なぜ、キャディーはこのような「転落」の一途を辿ったのであろうか。その理由は、キャディーの家庭、コンプソン家の退廃にあるようである。"Camera-like fidelity"[14] を持つベンジーの目に映るのは、退廃的な家族の姿であって、この家庭の愛情の欠落が、キャディーの「堕落」を招いたようである。この家庭では、父は仕事もせずに酒浸り、母親は愚痴をこぼすばかりで、おまけに母の弟がこれまた仕事もせずに頻繁にこの一家に転り込み、隣人の妻と不倫をするというていたらくである。

ベンジーの記憶の中で、一番彼が幸せだった頃は、彼がまだ3歳の時、彼の一番古い記憶の時である。その頃は、姉のキャディーは自分の側にいて、優しく、自分の名前もまだつけかえられる前であった。その日は祖母の葬式の日であったが、何も知らぬ子供たちは、外で長く遊ぶことができたのである。ところがこの場面を、フォークナーは巧に、失われたエデンと重ね合わせて描いている。この時、子供たちは川で遊んだのであったが、キャディーは、お尻を泥だらけにしてしまう。そして、お尻を泥だらけに

したキャディーが、花の咲く“pear tree”に登り、そこから、祖母の葬式の様子を覗き込むのである。この“pear tree”は“apple tree”としてはあまりにもはっきりとしたシンボルであるので、“pear tree”とした、あのエデンの「命の木」を思わせ[15]（実際、後になってフォークナーはインタヴューの際、キャディーは“apple tree”に登って、“forbidden window”を覗き込んだと言っている[16]）、非常に興味深い。また、この時、家の下から蛇が這い出して来るのも、エデン喪失の1つのシンボルであろうし（p. 37）、キャディーが木に登ったのを見つけたディルシーが、キャディーに向かって“You, Satan”（p. 45）と呼びかけているのも、神の戒を破った人間の罪を暗示しているようである。その夜、子供たちを寝かしつける時、ディルシーはキャディーがお尻を汚しているのを見て、お尻をごしごし擦ってきれいにしてやろうとする。このことについて、フォークナーは、『響きと怒り』を出版した4年後に書いた、“An Introduction to *The Sound and the Fury*”で次のように述べている。

> ...I had already gone on to night and the bedroom and Dilsey with the mudstained drawers scrubbing the naked backside of that doomed little girl—trying to cleanse with the sorry byblow of its soiling that body, flesh, whose shame they symbolised and prophesied, as though she already saw the dark future and the part she was to play in it trying to hold that crumbling household together.[17]

つまり、これまで検討してきたことからみて、フォークナーはこの汚れたキャディーのお尻を、“loss of innocence,”“loss of virginity”[18]、ひいては原罪のシンボルと見立てているのではないであろうか。そして、キャディーは失われたエバであり、ベンジーが懐かしがる一番古い記憶の過去は、失われたエデンに他ならない。キャディーの「転落」、ひいては

コンプソン家の退廃が、このようにして、フォークナーの描くレベルでは(ベンジーは意識していないが)、人間の罪として捉えられているのである。

律法に対して、キリストが説いた戒は愛であるが、コンプソン家には愛が欠落していることは、以前に述べた通りである。この家庭では、ベンジーもクェンティンもキャディーも、皆母親からかまいつけて貰えない。唯一人、Jason だけが、母親に偏愛されているようであるが、それも自分の里方の Bascomb 家似であるという理由で、無理にバスコム家の名誉を担わされているのである。彼女にとって大切なものは、「家柄」なのであり、彼女の人生態度は、母親としての子供たちへの愛情よりも、自分の "lady" としてのプライドによって大きく左右されている。キャディーが処女を喪失したと知ったコンプソン夫人は、夫に次のようなことをいう。

> what have I done to have been given children like these Benjamin was punishment enough and now for her to have no more regard for me her own mother... I thought that Benjamin was punishment enough for any sins I have committed I thought he was my punishment for putting aside my pride and marrying a man who held himself above me... (pp. 102-03)

コンプソン夫人も罪や罰のことを口にするが、彼女は、神の罰を異様な程にまで強調する。また、彼女の罪は、「プライドを捨てて、自分より身分を高く構えている者と結婚したという罪」であり、神に対する罪人としての悔い改めは、彼女のプライドを満たすことと巧にすり替えられている。彼女にとっての神は、彼女のレディーとしてのプライドを満足させる神である。ディルシーに、クェンティンが自殺したのは私を嘲り傷つけるためであるわけがない、と言いつつ彼女は "Whoever God is, He would not permit that. I'm a lady. You might not believe that from my

offspring, but I am”（p. 300）と言ってみせる。南部の貴族の伝統も、このように斜陽となった一家が形式的に守っていては、いかにも時代錯誤的であり、プライドを捨て切れないということは、ディルシーの持つ宗教的な立場からみて、悲劇的な状況である。

Ⅲ

ベンジーはその語りの中に、失われたエデン的風景を写し出してみせるだけであるが、コンプソン家の長男で、ハーヴァード大生のクェンティンは更に、自分の家の没落を「罪」に対する「罰」として捉えている。クェンティンの語るのは1910年６月２日の１日である。そしてこの日、クェンティンはチャールズ川で入水自殺を遂げる。愛のない家庭の悲劇は、このクェンティンの語りにも窺える。クェンティンの自殺の直接の原因は、妹キャディーの「転落」を自分が止められなかったことに絶望したためであるが、その背景に、彼の両親の影響があったことは否定できない。特にクェンティンの場合、父に大きな影響を受けていることが示されている。父は嘗ては仕事をしていたが、いまは宿命論を吐く酒浸りであり、[19] キャディーのことで失望するクェンティンに、自らの宿命論を信じ込ませようとする。クェンティンはこれに抵抗しながらも、彼の言うことを否定できない。クェンティンの父は言う、“a man is the sum of his misfortunes. One day you'd think misfortune would get tired, but then time is your misfortune”（p. 104）。何とか父の考えに反発したいクェンティンはそこで、父にキャディーと近親相姦を犯したと信じ込ませるという手段をとろうとする。しかし父は、“people cannot do anything that dreadful”（p. 80）と言ってとりあわない。

しかしそれにしても、なぜクェンティンは、キャディーと近親相姦を犯したと嘘をつくという、突飛なことを考えたのであろうか。一つには、彼には父を説得してみたい、父に勝ちたい、という気持があったためと思われる。クェンティンはしきりと、キャディーに対して“Im stronger

than you" (p. 154) と言って言うことをきかせようとしたり、キャディーの処女を奪ったドールトン・エイムズに町を出て行けと言ったりするが、いずれの場合にも自分の強さを示すことはできない。エイムズに殴られもしないのに失神し、Gerald という伊達男に殴られてまた失神し、昔ながらの騎士道よろしく妹を守ろうとしても、ことごとく失敗してしまう。せめて父を言い負かすことができたら、という気持は "I will am my fathers Progenitive" (p. 122) という強がりの言葉となる。そして彼が妹と近親相姦を犯したと嘘をつくもう一つの理由は、彼がキャディーの「罪」に対する、「罰」を求めたためである。クェンティンは "theres a curse on us" (p. 158) と言うが、彼女のしたことについて、彼には自分から罰を求めるという気持があったようである。そこで彼は妹と近親相姦を犯して、地獄で妹と二人きりになることを夢見る。

> *If it could just be a hell beyond that: the clean flame the two of us more than dead. Then you will have only me then only me then the two of us amid the pointing and the horror beyond the clean flame* (p. 116)

このことについては、フォークナーは「付録」でこのように述べている。

> QUENTIN Ⅲ. . . . Who loved not the idea of the incest which he would not commit, but some presbyterian concept of its eternal punishment: he, not God, could by that means cast himself and his sister both into hell, where he could guard her forever and keep her forevermore intact amid the eternal fires.[20]

クェンティンは罰を求めてはいても（それも神ではなく、自分が罰を与え

るのである)、神の救いを望んではいなかった。罰を宣告するのも、また許し救うことも、神のなすことであるが、彼が自ら罰を求めることは、彼が神に成り代るという「傲慢」を示してはいないであろうか。彼は父が次のように言ったことを思い出す。

> That Christ was not crucified: he was worn away by a minute clicking of little wheels. (p. 77)

彼の父にとっては、時間が絶対的なものであって、キリストもこれにはかなわなかった。父に近親相姦を犯したという嘘を信じ込ませることができなかったクェンティンが向った先は、神による救済ではなく自殺であった。ある意味では、父の宿命論への屈服である。クェンティンは自殺の前、次のことを思い出す。

> ...Father was teaching us that all men are just accumulations dolls stuffed with sawdust swept up from the trash heaps where all previous dolls had been thrown away the sawdust flowing from what wound in what side that not for me died not. (pp. 175-76)

人間はただの、おが屑の詰まった人形であって、その脇からおが屑が出ているとは、コンプソン氏の宿命論をよく表わしているが、興味深いことに、コーヒーはこの箇所を、ヨハネによる福音書第19章34節（「兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た」）と比較している。[21] つまり、贖罪の血を流して十字架上の死を遂げたキリストと、この「おが屑の詰まった人形」とは、アイロニーを形成していることになる、というのであろう。とすると、キリストの傷は人間の身代りであったのに、クェンティンにとって人形の傷は彼の「身代りではない」という

ことになるのである。十字架の贖いを、彼はこのような形で否定しているようである。

つまり、クェンティンには、罪に対する罰はあるが、神の恵みはない。その点に於て彼は悲劇的である。このことを、Wilder は次のように言っている。

> The tragedy of Quentin Compson is conditioned on the one hand by a social code of Southern chivalrous honor and womanhood, and by a truncated Christian conception of guilt and retribution, severed from all ideas of grace: law without grace.[22]

クェンティンの独白は、自らの不幸を歎いて、"I see now that I have not suffered long enough I see now that I must pay for your sins as well as mine" (p. 103) と夫に言うコンプソン夫人の、いかにも「律法的」な考え方と、軌を一にしているようである。彼は父の宿命論、母の、罪を自らの罰で支払うという考えを受け継ぎ、もはやディルシーのいる救いの境地とは、遙かに離れたところに立っている。彼は自殺の直前、小さい頃家にあった本の中の一枚の絵のことを語るが、それはこの家の状況を表わして、大変象徴的である。

> When I was little there was a picture in one of our books, a dark place into which a single weak ray of light came slanting upon two faces lifted out of the shadow.... I'd have to turn back to it until the dungeon was Mother herself she and Father upward into weak light holding hands and us lost somewhere below even them without even a ray of light. (p. 173)

両親のいる暗い場所の、更に暗いところに閉じ込められた子供たちには、神の救いの光が届かないのである。時代が下るにつれて、そのあるべき姿を見失った、社会的通念と宗教的風土が、この一家の暗さをつくり出している。

Ⅳ

フォークナーは、コンプソン家の3人の兄弟に、第1～3部で同じ出来事、すなわち、キャディーの「転落」とコンプソン家の退廃について語らせるのであるが、第3部のジェーソンの語りは、第1部のベンジー、また、第2部のクェンティンの語りとは大変趣を変えている。ジェーソンは「付録」で“Sane” Compson と呼ばれている。[23] 第1部のベンジーが、白痴であるために、また第2部のクェンティンが自殺直前の錯乱した頭で語っているために、全く論理的でない主観を語っているのに対し、彼の語りは非常に論理的である。Vickery は次のように述べている。

> The third section shows a greater degree of clarity though not of objectivity. The reason for this is that Jason operates in terms of a logic which forms the basis of social communication.[24]

ところがこの「論理的な」ジェーソンが、実はベンジーやクェンティンと同じく、コンプソン家の没落にいかに大きな屈折を受けているのかということを示すことに、フォークナーは工夫を凝らしている。フォークナーはある時、ジェーソンのことを“The most vicious character”[25] と言ったことがあったが、では、ジェーソンの「悪者ぶり」を分析してみよう。

彼の「悪者ぶり」は随所に見られるが、まず、一つ次の例を見てみる。

コンプソン氏の葬儀の時、家を追われたキャディーが人目を忍んで帰っ

てくる。その際、彼女は娘のクェンティンに会いたい一心で、[26] ジェーソンに娘と「ちょっとだけ」("a minute" pp. 203, 204) 会わせてくれと頼む。すると、ジェーソンはさんざんじらした後、まず金を受け取ってから、娘に会わせてやることにする。そして、娘のクェンティンを馬車に乗せ、馬車の窓からクェンティンの顔を見せて、全速力でキャディーの前を通り過ぎる。文字通り「ちょっとだけ」見せてやったのである。ジェーソンはこの後、後を走って追いかけるキャディーを振り切り、帰ってから、せしめた金の勘定をしている (p. 205)。このジェーソンの "brutal and cold-hearted man"[27] ぶりは、この例の他にも、どのみち行きはしないショーの券を2枚も持っていながら、ショーに行きたくてたまらない Luster の前でわざと券を焼いてみせたり、キャディーの娘をいびって送金を横領する様に、充分に表わされている。しかし、その悪人ぶりには、何か空回りのような観がつきまとう。彼は、キャディーの夫に約束された銀行の職を、キャディーが離婚されたためにフイにされ、自殺した兄とは違って大学にも行かせて貰えず、小さい田舎町に埋もれて一家を養わなければならなかった。そういうことを考えると、ジェーソンが毒舌を振いながら周囲の人間にあたりちらし、自己憐憫に陥る様は文字通り哀れである。彼が一方では "Do you think I need any man's help to stand on my feet?" (p. 262) と豪語してみせる一方で、姪のクェンティンを執拗に追い回したり、綿相場の売買に失敗してわめきちらし、果ては "Sometimes I think what's the use of anything. With the precedent I've been set I must be crazy to keep on" (p. 235) と言う様には、まるで彼が、「合理性」を持ち合わせているおかげで自殺こそしないものの、基本的にはクェンティンとあまり変らない状況に置かれていることを示しているようである。一日中、ろくに仕事もせずに、姪を追いかけ回したり、綿の相場の値動きに大騒ぎするジェーソンに、Jobという黒人はこう言う、"You fools a man whut so smart he cant even keep up wid hisself" (p. 250)。それは誰だとジェーソンが尋ねると、それは "Mr Jason

Compson"のことだと、ジョーブは答える（p. 250)。

ジェーソンの悪人ぶりは単に、道徳的に「悪い」ことをすることにはとどまらず、宗教的な「罪」に及んでいるようである。ディルシーは、キャディーをキャディーの娘に会わせてやったこと、また、ベンジーをキャディーに会わせたことをジェーソンに責められたので、こう言っている。

> "You's a cold man, Jason, if man you is,... I thank de Lawd I got mo heart dan dat, even ef hit is black." (pp. 207-08)

ところが、ジェーソンはこれに対して、"At least I'm man enough to keep that flour barrel full" (p. 208) と答える。確かに、ジェーソンの言うことは「正しい」。しかし、「正しい」ことをいつも通すという合理主義は、前に触れた、この小説に於ける律法的な要素を思い出させる。荒野でサタンが理屈をこねたのに対してキリストは、「人はパンだけで生きるものではない」との聖書の言葉を引用して答えたが（ルカによる福音書4：4)、上のディルシーとジェーソンの会話は、ジェーソンの律法主義的またサタン的な面を暗示しているともとれる。

フォークナーは「付録」で、ジェーソンは「いかなる形にせよ神のことを考えなかった」[28] と述べているが、この意味は、神を無視していた、という意味のようである。聖書の神を彼は信じていなかったが、何らかの、自分より力ある存在、"Circumstance" (p. 306) と呼ばれるもの、を相手に彼は戦っているつもりであった。彼は是迄溜めてきた金と、キャディーの娘のクェンティンから横領した金を、クェンティンに取られて逃げられてしまうが、彼は保安官が自分の味方でないとわかると、自分で車をとばして、クェンティンと連れの男の後を追う。その時彼は、"I'm Jason Compson. See if you can stop me" (p. 306) と不敵な名乗を上げる。それからの彼の様子は次の通りである。

> From time to time he passed churches, unpainted frame buildings with sheet iron steeples, surrounded by tethered teams and shabby motor-cars, and it seemed to him that each of them was a picket-post where the rear guards of Circumstance peeped fleetingly back at him. "And damn You, too," he said. "See if You can stop me," thinking of himself, his file of soldiers with the menacled sheriff in the rear, dragging Onipotence down from his throne, if necessary; of the enbattled legions of both hell and heaven through which he tore his way and put his hands at last on his fleeing niece. (p. 306)

自分の一味を率いて、"Onipotence" をその玉座から引きずり下ろそうとするジェーソンのこの様子は、丁度、Milton の *Paradise Lost* に登場する、サタンを思い出させる。ここでは、先の箇所よりもはっきりと、ジェーソンがサタンのような人物であることが示されている。しかしこの「サタン」は、ミルトンのサタンと同じく、惨めな境遇を吐露して、どこか同情を誘う。ジェーソンがコンプソン家の重荷を一人でしょっていたことを考えると、最後に金を取り戻せずにすごすごと帰ってゆく彼の姿は悲劇的ですらある。フォークナーは、ジェーソンもまた、ディルシーとは対照的な、信仰を失った人物、しかも「悪人」と描くが、彼が悪玉の一面しか持たぬ人物には描かない。彼に数々のブラック・ユーモアを言わせ、彼を悪事を働いては失敗する、ちょっと哀れな悪人に仕立てて、この人物がステレオタイプに堕ちるのを防いでいる。

V

第4部で中心的に描かれている人物はディルシーであるが、この部は客

観的描写である。第1～3部でも、ディルシーは、コンプソン家の人々の退廃した宗教的雰囲気とは異なった、宗教的立場にいることが、断片的ながら他の人物の主観的な語りの中に表わされていた。しかしここでは、ディルシーのその立場が、客観的に描かれている。これは、彼女の立場が、独断的でないことを示すのに効果的である。

第4部の日付、1928年4月8日は Easter Sunday で、コンプソン家で働く黒人の Gibson 一家は、黒人教会の Easter service に出掛けてゆく。この日は、セント・ルイスからシーゴッグという“Dat big preacher”(p. 290)を迎えて特別の礼拝が持たれることになっている。ところがこの説教師はとるに足りない外見で、期待していた会衆は一同がっかりしてしまう。しかしこの説教師の、初めの白人調の冷たい口調が、黒人的な口調に変るにつれて、彼の姿勢は外見のみすぼらしさを超越していく。そして彼は、会衆をかのペンテコステの集会のような感動へと導いていくのである。

どうして、コンプソン家にはないこのような宗教的雰囲気が、黒人の教会にはあるのであろうか。フォークナーは、この小説に於て、もし救いというものがあるとするなら、それは一筋縄では得られないものであると示している。コンプソン家に見られたように、白人には、家柄や誇りがあり、また、黒人教会に白痴で白人のベンジーをディルシーが連れて行けば、このことをとやかくいう白人もいる（これに対してディルシーは、“de good Lawd dont keer whether he bright er not”(p. 290) と言っている)。シーゴックの説教も、白人調で話し始めた時には説得力が出ない。しかしひとたび、黒人調になり、白人社会にまとわりつく人種や家柄といった「人間的」な要素が取り除かれる時、説教師の態度が“serene, tortured crucifix”(p. 294) と同じようなものにまで変って見える。

シーゴックの説教には、イスラエルの出エジプトがあり、歴代のイスラエルの人々があり、またイエスの誕生、十字架の死、そして復活がある。この小説の第1～3部の語り手が、現在及び過去に限られた、目に見える

世界を眼中に置いていたのに対し、この説教では、イスラエルの歴史から始まって、イエスの生涯と復活という永遠の未来に続く時間が示される。とりも直さず、これはディルシーが共有する時間である。ここでは時はクロノスという、円環的、ヘレニズム的時間ではなく、ヘブライズムの神の時、カイロスであり、[29] 子羊であるイエスの血によって贖われた時間の中では、もはや贖われない「過去の出来事」は存在しない。キャディーに関する過去の出来事に捉われ、また、父から、全てのものが "temporary" (p. 177) であると言われてショックを受け、それを認めざるを得ず自殺するクェンティンには、この世に "temporary" でないものは存在しない。クェンティンにとっては正に、「未来は閉ざされている」[30] のである。白痴で、現在も過去も区別のつかぬベンジーにも、神を信じない合理主義者のジェーソンにも、「永遠の命」(ヨハネによる福音書17: 3) は、その存在すらわからないものである。

また、この説教では、クェンティンが見なかった、絶望の中での希望、しかも永続する希望が示される。"I sees de darkness en de death everlastin upon de generations" (p. 296) という絶望は、一転し、説教師は、イエスの復活の勝利を語る。"I sees de doom crack en de golden horns shoutin down de glory, en de arisen dead whut got de blood en de ricklickshun of de Lamb!" (p. 297)

シーゴックは繰り返し、"I got de ricklickshun en de blood of de Lamb!"(p. 295)という。"recollection" とは記憶、すなわち過去に属する筈のものであり、また十字架と復活も、歴史的には過去の出来事であるが、十字架の贖いは、彼にとって、紛れもなく現在の "reality" である。[31] シーゴックは現在見ているものとして、説教を進める。("I sees Calvary ..." (p. 296). "Whut I see, O sinner? I sees de resurrection en de light..." (p. 297).) これはいわゆる "dramatic present" ではなく、彼にとっては、カイロスの時間の中で行われる現実である。

ディルシーはこの説教を聴いて感動し，帰り道、"I've seed de first

en de last”（p. 297）と言う。初めと終りとは、何を指すのであろうか。ディルシーの信仰が黙示録的であることは以前にのべたが、ヨハネの黙示録第22章13節には「わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである」という、子羊であるイエスの言葉がある。ディルシーは一つには、このイエスのことを考えていたのである。彼女がたった今聴いた説教も、“the recollection and the blood of the Lamb”についてであり、しかも、イスラエルの歴史からイエスの生涯、十字架と復活、そして永遠の命が述べられた。ヨハネの黙示録では、イエスの再臨と最後の審判が描かれる。こういう意味で、ディルシーの信仰は、コンプソン家の崩壊という危機の中にあって、救いを希求する、ヨハネの黙示録のヴィジョンと軌を同じくしているのである。またもう一つ、彼女の言う「始め」と「終り」とは、コンプソン家の終末を彼女が今目のあたりにしているという意味も含めている。「付録」に於て、フォークナーは、コンプソン家がジェーソンの代で「高潔さに欠けるようになり誇りがおおかたは虚栄と自己憐憫になってしまったあとでさえも彼らの中にいくらかの品位と誇りを持ち続けてきた人たちの」[32] 長い家系が終っていた、という。もし、ディルシーの信仰に救いの立場を見ることができるとするなら、この日、イースターの礼拝に出席したのは、コンプソン家ではベンジー一人であるというのは、大変に暗示的である。現代社会の、白人の家庭では愛が失われ、律法的な宗教風土のみが残り、南部の伝統—高潔さ—も、今は虚栄と自己憐憫になってしまった。黒人の召使たちに、白人には忘れ去られた信仰が残っているのみである。

VI

是迄、『響きと怒り』に於ける、様々な人物たちのキリスト教とのかかわりや宗教観を探ってきた。混沌とした白人社会の価値の変動に伴って、ある者は家柄を誇り、ある者はアルコール中毒となり、またある者は徹底した合理主義者となる。そしてこれらの人物たちの態度は、ディルシーと

いう、彼らに仕える黒人の召使の信仰と対照的な形で示される。しかしフォークナーは決して、コンプソン家の人間が示した態度は黒人たちにはあり得ないことであるとも、白人の家庭の崩壊が、このまま不動であるとも示してはいない。第4部でディルシーの孫のラスターは、コンプソン家の人々について、"Dese funny folks. Glad I aint none of em" (p. 276) と言うが、それに対しディルシーは、"Lemme tell you somethin, nigger boy, you got jes es much Compson devilment in you es any of em"(p. 276) と言っている。ディルシーは「原罪のようなものを信じている」と述べたのはブルックスであったが、[33] 先のディルシーの言葉には、誰もが、白人も黒人も、完全な存在ではあり得ないし、誰もがコンプソン家の人間のようになり得るということが表わされている。

この作品は "two lost women"[34] の悲劇だとフォークナーは語ったことがあった。一人はキャディーで、もう一人はその娘、クェンティンである。「付録」に於て、フォークナーはキャディーとクェンティンのどちらにも、必ずしも幸せな行く末を与えているとは言えない。キャディーはナチの参謀と共にフランスにいたことが認められた後、消息を断ち、[35] クェンティンもコンプソン家から駆け落ちした後、行方不明になる。[36] しかし、クェンティンの脱出は、ある意味では非常に象徴的である。彼女はキャディーのように、後に「人質」を残さなかったし、彼女が脱出した日がイースターで、きちんと鍵をかけた筈の彼女の部屋から彼女が脱出したことを考えてみると、この話は、あのイエスの復活後の、空の墓を思わせる。[37] おそらく、このイメージの重なりには、アイロニーも含まれているであろう。すなわち、イエスは復活したが、クェンティンの場合は行方不明であること、がそれである。しかし、行方不明であるということは、裏を返せば、コンプソン家を脱出したクェンティンが、少なくともコンプソン家の様々な問題—家柄や、意地の悪い叔父や、祖母—から解放されたということも、一面では意味している。

この作品は、T. S. Eliot の *The Waste Land* (1922) と比較されるこ

とがある。[38] 混迷を深める文明社会に於て、宗教的な救いを希求するといったテーマを持つ『荒地』では、救いが最後に示されるのか、示されないのか、結局のところはわからない。コンプソン家を舞台にしたこの小説でも、テーマは非常に良く似ている。確かに、ディルシーにとっては、救いはあるであろう。しかし、彼女自身の霊の問題はともかく、コンプソン家の悲劇的な人物たちについてはどうか。クェンティンは最後に姿を消し、その後の消息はわからない。彼女の行き着く先は、まだ示されずに残ったままである。

小説のラスト・シーンは、ベンジーが、いつもは南軍兵士像を馬車で右に廻って墓地に行くのに、この日だけ左廻りになったために泣きわめき、クェンティンを追跡するのを諦めてそこを通りかかったジェーソンが、馭者のラスターを怒って殴りつけるという、正に "the sound and the fury" という題名通りの場面である。気違じみた、姪の追跡を断念したジェーソンと、右廻りか左廻りかしか問題にしないベンジーとがいる。ここにも、結局何の解決も示されない。

『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*) は、有名な *Macbeth* 第5幕第5場の台詞から取られた題名である。"[Life] is a tale / Told by an idiot, full of sound and fury,/ Signifying nothing."[39] この台詞では、人生が無意味であることが述べられるが、これは丁度、コンプソン氏の宿命論的な言葉と、同じ響きを持っている。この題名が、コンプソン家の人々の置かれた状況を如実に表わしている。ディルシーの持つ信仰から遠くかけ離れた、悲劇的なコンプソン家の人々に救いは来るのか—この問題に何らかの解決を見るまでに、フォークナーは後の、*Requiem for a Nun* (1951)、また *A Fable* (1954) を書かねばならなかったのである。

Notes

1 Arthur F. Kinney, "Introduction," in *Critical Essays on William Faulkner: The Compson Family*, ed. Kinney (Boston: G. K. Hall & Co., 1982), p. 2.

2 Cf. André Bleikasten, *The Most Splendid Failure: Faulkner's* The Sound and the Fury (Bloomington: Indiana University Press, 1976), pp. 202-04.

3 William Faulkner, *The Sound and the Fury: New, Corrected Edition* (New York: Random House, 1984), p. 90. 以下、この作品からの引用は全てこの版により、引用頁は本文中に示す。

4 James B. Meriwether and Michael Millgate, eds., *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner 1926—1962* (1968; rpt. Lincoln: University of Nebraska Press, 1980), pp. 244-45.

5 Cleanth Brooks, "Man, Time, and Eternity (*The Sound and the Fury*)," in *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (1963; rpt. New Haven, Conn.: Yale University Press, 1966), p. 343.

6 Cf. Randall Stewart, *American Literature and Christian Doctrine* (Baton Rouge, La.: Louisiana State Univevsity Press, 1958), p. 141.

7 例えば、大橋健三郎編注,『響きと怒り〈英潮社新社ペンギンブックス〉』(英潮社新社, 1973), p. 95 また、尾上政次訳, 『フォークナー全集5』(冨山房, 1969), 第一部の注, p. 330参照。

8 Jessie McGuire Coffee, "Concordance and Commentary," in *Faulkner's Un-Christlike Christians: Biblical Allusions in the Novels* (Ann Arbor, Mich.: UMI Research Press, 1983), p. 102.

9 聖書, ヨハネの黙示録第20章12節, フィリピの信徒への手紙第4章3節, 他 (新共同訳, 日本聖書協会, 1987), 以下、聖書からの引用は、全てこの新共同訳である。尚、コーヒーはこの「命の書」について黙20:12, 15の箇所をディルシーの言葉と比較している。

10 佐竹明, 『佐竹明聖書講義　黙示録の世界』(新地書房, 1987), p. 166.

11 蓮見和男訳, 『ヨハネの手紙・黙示録 シュラッター新約聖書講解14』(新教出版社, 1979), p. 340.

12 Faulkner, "Appendix: The Compsons," in *The Portable Faulkner*, ed. Malcolm Cowley, 2nd ed. (New York, 1967; rpt. Harmondsworth, Middlesex, England: Penguin Books Ltd., 1983), p. 718.

13 Lawrence Thompson, "Mirror Analogues in *The Sound and the Fury*," in *William Faulkner: Three Decades of Criticism*, ed. Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery (East Lansing, Mich.: Michigan State University Press, 1960), p. 214. 尚、この訳は大橋健三郎氏による。大橋健三郎編,『現代作家論

ウィリアム・フォークナー』（早川書房，1973），p. 158.

14 Michael Millgate, "*The Sound and the Fury,*" in *The Achievement of William Faulkner* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1978), p. 91.

15 Cf. 大橋，『響きと怒り』，pp. 74-75.

16 Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, eds., *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia, 1957—1958* (1959; rpt. Charlottesville, Va.: University of Virginia Press, 1977), p. 31.

17 Faulkner, "An Introduction to *The Sound and the Fury,*" in *A Faulkner Miscellany,* ed. James B. Meriwether (Jackson: University Press of Mississippi, 1974), pp. 159-60.

18 大橋，『響きと怒り』，p. 74.

19 Faulkner, "Appendix," pp. 708-09.

20 *Ibid.*, pp. 709-10.

21 Coffee, p. 77.

22 Amos N. Wilder, "Vestigial Moralities in *The Sound and the Fury,*" in *Religious Perspectives in Faulkner's Fiction: Yoknapatawpha and Beyond,* ed. J. Robert Barth, S. J. (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1972), p. 97.

23 Faulkner, "Appendix," p. 716.

24 Olga W. Vickery, "*The Sound and the Fury:* A Study in Perspective," in *William Faulkner:* The Sound and the Fury, ed. David Minter (New York: W. W. Norton & Company, 1987), p. 295.

25 Meriwether and Millgate, p. 146.

26 この小説には二人のクェンティン・コンプソンが登場する。一人はハーヴァード大生になったクェンティンで、もう一人は、キャディーの娘のクェンティンである。

27 Brooks, p. 338.

28 Faulkner, "Appendix," p. 716.

29 清水氾，「サトペンの美しい髪——フォークナーと聖書　その(一)」，『外国文学研究』第5号（奈良女子大学文学部英語英米文学科，1983年3月），73参照。

30 Jean Paul Sartre, "Time in Faulkner: *The Sound and the Fury,*" *La Nouvelle Revue française*, 52 (June 1939), 1057-61 ; 53 (July 1939), 147-51. Translated and reprinted in *William Faulkner: Three Decades of Criticism*, ed. Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery (East Lansing, Mich.: Michigan State University Press, 1960), p. 232.

31 Cf. J. Robert Barth, S. J. "Commentary," in *Religious Perspectives in Faulkner's Fiction: Yoknapatawpha and Beyond* (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1972), p. 104.

32 Faulkner, "Appendix," p. 713. 尚、この訳は尾上政次訳，『フォークナー全集

5』(冨山房, 1969), pp. 346-47による。

33 Brooks, p. 343.

34 Meriwether and Millgate, p. 244.

35 Faulkner, "Appendix," pp. 713-16.

36 Cf. *Ibid.*, p. 721.

37 Cf. Millgate, "*The Sound and the Fury*," p. 103.

38 Hyatt H. Waggoner, "Form, Solidity, Color: *The Sound and the Fury*," in *William Faulkner: From Jefferson to the World* (Lexington: University of Kentucky Press, 1959), pp. 59-61 及びIda Fasel, "A 'Conversation' Between Faulkner and Eliot," *Mississippi Quarterly*, XX (Fall 1967), 195-206 参照。

39 William Shakespeare, *Macbeth* V. v. 26-28, The Arden Shakespeare, ed. Kenneth Muir, 7th ed. (1951; rpt. with minor corrections London: Methuen, 1955).